長崎平和宣言

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で、核兵器のない平和な世界を実現しようとする長崎の決意として国の内外に発信しました。

核兵器は人間を壊す残酷な兵器です。

1945年8月9日午前11時2分、米軍機が投下した一発の原子爆弾が、上空でさく裂した瞬間、長崎の街に猛烈な爆風と熱線が襲いかかりました。あとには、黒焦げの亡骸、全身が焼けただれた人、内臓が飛び出した人、無数のガラス片が体に刺さり苦しむ人があふれ、長崎は地獄と化しました。

原爆から放たれた放射線は人々の体を貫き、そのために引き起こされる病気や障害は、辛うじて生き残った人たちを今も苦しめています。

核兵器は人間を壊し続ける残酷な兵器なのです。

今年5月、アメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が被爆地・広島を訪問しました。大統領は、その行動によって、自分の目と、耳と、心で感じることの大切さを世界に示しました。

核兵器保有国をはじめとする各国のリーダーの皆さん、そして世界中の皆さん。長崎や広島に来てください。原子雲の下で人間に何が起きたのかを知ってください。事実を知ること、それこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです。

今年、ジュネーブの国連欧州本部で、核軍縮交渉を前進させる法的な枠組みについて話し合う会議が開かれています。法的な議論を行う場ができたことは、大きな前進です。しかし、まもなく結果がまとめられるこの会議に、核兵器保有国は出席していません。そして、会議の中では、核兵器の抑止力に依存する国々と、核兵器禁止の交渉開始を主張する国々との対立が続いています。このままでは、核兵器廃絶への道筋を示すことができないまま、会議が閉会してしまいます。

核兵器保有国のリーダーの皆さん、今からでも遅くはありません。この会議に出席し、議論に参加してください。

国連、各国政府及び国会、NGOを含む市民社会に訴えます。核兵器廃絶に向けて、法的な議論を行う場を決して絶やしてはなりません。今年秋の国連総会で、核兵器のない世界の実現に向けた法的な枠組みに関する協議と交渉の場を設けてください。そして、人類社会の一員として、解決策を見出す努力を続けてください。

核兵器保有国では、より高性能の核兵器に置き換える計画が進行中です。このままでは核兵器のない世界の実現がさらに遠のいてしまいます。

今こそ、人類の未来を壊さないために、持てる限りの「英知」を結集してください。

日本政府は、核兵器廃絶を訴えながらも、一方では核抑止力に依存する立場をとっています。この矛盾を超える方法として、非核三原則の法制化とともに、核抑止力に頼らない安全保障の枠組みである「北東アジア非核兵器地帯」の創設を検討してください。核兵器の非人道性をよく知る唯一の戦争被爆国として、非核兵器地帯という人類のひとつの「英知」を行動に移すリーダーシップを発揮してください。

核兵器の歴史は、不信感の歴史です。

国同士の不信の中で、より威力のある、より遠くに飛ぶ核兵器が開発されてきました。世界には未だに1万5千発以上もの核兵器が存在し、戦争、事故、テロなどにより、使われる危険が続いています。

この流れを断ち切り、不信のサイクルを信頼のサイクルに転換するためにできることのひとつは、粘り強く信頼を生み続けることです。

我が国は日本国憲法の平和の理念に基づき、人道支援など、世界に貢献することで信頼を広げようと努力してきました。ふたたび戦争をしないために、平和国家としての道をこれからも歩み続けなければなりません。

市民社会の一員である私たち一人ひとりにも、できることがあります。国を越えて人と交わることで、言葉や文化、考え方の違いを理解し合い、身近に信頼を生み出すことです。オバマ大統領を温かく迎えた広島市民の姿もそれを表しています。市民社会の行動は、一つひとつは小さく見えても、国同士の信頼関係を築くための、強くかけがえのない礎となります。

被爆から71年がたち、被爆者の平均年齢は80歳を越えました。世界が「被爆者のいない時代」を迎える日が少しずつ近づいています。戦争、そして戦争が生んだ被爆の体験をどう受け継いでいくかが、今、問われています。

若い世代の皆さん、あなたたちが当たり前と感じる日常、例えば、お母さんの優しい手、お父さんの温かいまなざし、友だちとの会話、好きな人の笑顔…。そのすべてを奪い去ってしまうのが戦争です。

戦争体験、被爆者の体験に、ぜひ一度耳を傾けてみてください。つらい経験を語ることは苦しいことです。それでも語ってくれるのは、未来の人たちを守りたいからだということを知ってください。

長崎では、被爆者に代わって子どもや孫の世代が体験を語り伝える活動が始まっています。焼け残った城山小学校の校舎などを国の史跡として後世に残す活動も進んでいます。

若い世代の皆さん、未来のために、過去に向き合う一歩を踏み出してみませんか。

福島での原発事故から5年が経過しました。長崎は、放射能による苦しみを体験したまちとして、福島を応援し続けます。

日本政府には、今なお原爆の後遺症に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、被爆地域の拡大をはじめとする被爆体験者の一日も早い救済を強く求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、世界の人々とともに、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くすことをここに宣言します。

2016年（平成28年）8月9日
長崎市長　田上富久

平和祈念式典

被爆者や遺族、内閣総理大臣や世界各国の代表など約5600人の参列の下、8月9日、被爆71周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典を平和公園で執り行いました。

「若者として、被爆者の思いを次の世代に伝えたい」と高校生が司会を担当。

田上市長は「長崎平和宣言」で、核兵器保有国の首脳らに被爆地訪問を要請するほか、核兵器廃絶に向けて、持てる限りの「人類の英知を結集」するよう呼びかけました。

日本政府には非核三原則の法制化や被爆者援護の拡充、被爆体験者の救済を求めました。

被爆体験の継承の重要性にも触れ、5月のオバマ米国大統領の広島訪問について、「自分の目と、耳と、心で感じることの大切さ」を世界に示したと語りました。

さらに、被爆者代表による「平和への誓い」のほか、被爆者歌う会「ひまわり」、山里小学校の児童、純心女子高等学校の生徒による合唱なども行われました。

この日、長崎のまちは原爆により犠牲となられたかたへの深い追悼の念に包まれました。

被爆者代表、遺族代表、青少年代表、市長がこの一年間で亡くなられた3487人の氏名が記された死没者名簿を納めました。

これにより、あわせて17万2230人のかたのお名前が奉安されました。

被爆者代表、遺族代表、小学生代表、中学生代表、高校生代表が原爆犠牲者に献水しました。

また、被爆者代表、遺族代表、市長、市議会議長に続いて、多くの来賓が献花されました。

司会をつとめた
内野百香さん（左）と脇山莉加さん

被爆者代表・井原東洋一さん
による「平和への誓い」

山里小学校児童による
「あの子」の合唱

純心女子高等学校生徒による
「千羽鶴」の合唱

平和祈念式典に参列した多くの各国大使が原爆資料館を見学。原爆落下中心地碑にも花を手向け、原爆犠牲者の冥福を祈りました。

市では、これからも、核兵器保有国の首脳のほか各国指導者へ長崎訪問を要請し、核兵器の非人道性を訴えていきます。

長崎の思い

平和のため「自分に何ができるか」考えた夏

長崎原爆の日の前後、さまざまな取り組みが行われました。国の内外から長崎を訪れた多くのかたは、被爆の惨禍に触れ、被爆者の声に耳を傾けながら、核兵器のない世界を求める長崎の思いに共感していました。

青少年が被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深める「青少年ピースフォーラム」。全国から集まった青少年と、長崎の高校生や大学生などが一緒に被爆体験講話を聞いたり、被爆建造物などを巡ったりしながら意見交換を行い、平和について一緒に考える時間を過ごしました。

被爆地の平和への取り組みや平和への願いを全国に伝えようと、全国から9組の小学生親子による「親子記者」が長崎を訪れ、8月8～11日、平和祈念式典や被爆者への取材、被爆建造物の見学などを行いました。参加者は、今回の取材で得た貴重な経験をそれぞれの若い世代へ伝えていくこととなるでしょう。

平和祈念式典の前夜に平和公園で行われた「平和の灯（ともしび）」には約3000人が来場。平和へのメッセージが書き込まれたキャンドルに灯（ひ）をともすと、平和を祈る静かな時間が流れました。

今年3月に最新の映像・情報機器などの導入により展示内容を拡充した長崎原爆資料館。8月7～9日は通常より開館時間を延長し、多くのかたが被爆の実相に触れました。また、市内の小中学校では、「平和集会」などで平和の尊さを学びました。

親子記者

青少年ピースフォーラム

平和集会（各学校）

平和の灯

【問い合わせ】長崎原爆資料館（☎844-1231）
調査課（☎829-1147）

世界に向けた